

巻頭言：最近の雑誌・報告書原稿について思うこと

巻頭にいささか気難しい話をするを許していただきたい。あえて雑誌や報告書原稿の問題を取り上げるのには理由がある。印刷される論文や報文の原稿は基本的に、読みやすく、正しく理解されるよう的確に、そして第三者に検証や幅広い利用を委ねうる資料的価値をもつことが要求されるが、実際には多種多様な問題に触れ、植生史研究においても深刻と受けとめなければならない問題にしばしば出くわすからである。研究者にとって論文・報文の原稿を書くことはたいへん重要な仕事のひとつであるだけに、この種の問題を考慮しておくことは無意味なことではない。

論文・報文にみられる問題は、それを改善するという立場から大きく2つの類に分けうる。ひとつは、印刷されてしまう前、すなわち原稿の段階において改善しうる類である。これには、主文のない無意味なパラグラフ、主文の分断による自滅的パラグラフ、意味不詳のセンテンス、論理矛盾の議論、文章記載と図・表記載の不一致、事実記載と議論の非連続、逆の論理としての引用など歪曲された引用などが含まれる。他は、研究姿勢や論文をなぜ書くのかといった基本に触れる問題で、原稿執筆以前の問題として対処すべき類である。これには、ある産地で採取された化石写真を、産地や層準が異なる他の複数の産地の記載にも転用するといった犯罪ともいえる行為、あるいはすべてが自分の発見であるがごとく自分の論文・報文しか引用しない場合などが含まれる。

これらは、研究者の性分に依存するものもあるだろうが、改善しなければならない問題であることに違いはない。前者の場合についてみると、原稿段階において綿密な推敲を重ね、投稿に先立って原稿校閲を繰り返すことで、ある程度達成の糸口が得られるはずである。投稿すればどうせ編集者や査読者からいろんなケチがつくのでその時々修正すればよい、などという気で投稿された原稿の中には、当初から投稿原稿として認められないものが多い。そういうものでも編集者や査読者が真剣に修正に取り組んでくれる場合が稀にあるが、それは余程のこととみるべきで、もとよりそれを願うべきでない。本誌に収められた文献リストからも明らかなように、たいへんな報告書ばかりであるが、なぐり書き原稿や、あばら原稿といって校正時に肉付けするという原稿の類がそれらを賑わしている現状を直視すべきである。そういう機会をこそ利用して、すぐれた原稿をつくり上げ、完全原稿を投稿するトレーニングを重ねるべきであろう。そのためには、個人的な原稿執筆のトレーニングはもちろんであるが、たとえば原稿執筆の機会が多いと思われる大学・大学院では、教員が学生などのトレーニングに対して自分の研究や執筆にも増して一層力を注ぐべきではないだろうか。

さて、後者の場合、すなわち原稿執筆以前の問題はやや深刻である。とくに最初に上げた例は、記載とはいったい何なのか、論文を何のために書くのかという問いを投げかけたいほどのものである。化石の記録を整理する、スケッチや写真を整理する。そこで、まったく別個の産地の産出化石の記載

に、同一個体のスケッチや写真が載っていたら、どうすればいいのだろうか。学生時代、私は公表された資料の整理をしていて、その奇異な発見にショックを受けたことがある。そのショックがようやく和らぎ消え去ろうかとも思われた矢先、つい先だって新たな同様の発見に遭遇してしまった。このような事実が現状下に潜伏している以上、その著者によってなされた記載にもはや信頼性はない。それを取り戻すには、事実を蓄積する段階からトレーニングをやり直し、既報文を改めるのが先決であろうか。

最初に述べたように、論文や報文は広く読まれ、利用されるべきものだから、印刷されるべき原稿がそれに沿っていることが不可欠である。報告書だからなぐり書き原稿で間に合わすという手合いが多いのには、いささか軽い頭を抱えてしまう。報告書のみが多くなるというのは決していいことだとは思われないが、中には広く読まれうるものもあり、また学術雑誌では編集上の都合から盛り込めないような豊富で詳細な事実記載が許される場合など、種々のメリットももっている。査読者の手に掛かる学術雑誌を膨らませていかなければならないことは言うまでもないが、学術雑誌であろうが報告書であろうが、基本的にはその内容を充実させることが大切であるように私は思う。ここで私が指摘した問題は、原稿を欧文にすべきか和文にすべきかといった問題とは性質が異なることは理解いただけたと思う。

植生史研究はようやく第3号発行のはこびとなったが、以上で私が指摘した問題点やほかの多くの基礎的問題を掘り起こす材料がかなり出てきたように思われる。本誌を通して、何を言うかではなく、何を以て何を言うかという基本に立ち戻って、長い目で益することを追い求めたいと思うのは編集に携わる者ばかりではないであろう。本誌の後半を占める記録類や文献リストは多大な場所を取ってしまうが、そうした目で編集されていることを理解していただきたい。ただ、これらは分量が多く経費がかかるうえ、編集や校正にふつうの倍以上の時間を要するので、これらの印刷を安価にし、その分総説を多くすることも考えられている。これは印刷物を編集し、発行する立場からの願望であるかも知れない。どのような雑誌においても、先に私が指摘した原稿における問題や、編集側の願望なり悩みは、私が知る範囲ではたいていつきもののように思われる。それらを徐々にではあっても解消していこうと意気込んでいる昨今ではある。

1988年8月 辻 誠一郎